

教職員のコーナー

バックアップ

本田 栄敏

みなさんは野球が好きですか。僕が一番好きな漫画は野球の「キャプテン」、少年時代は近所のなかまと田んぼで野球、中学入学と同時に兄二人のたどった道を進み、野球部に入部、でも実はこのころの僕は、何か特に野球に思い入れがあったわけではありませんでした。それが、中学、高校、大学となぜか野球と離れられなくなり、どんどん野球にはまっていき、野球の面白さを知ってしまうことになりました。何より、野球を通して本当にいろいろ大切なことを学び、たくさんの「友」を得、それが僕の貴重な財産となりました。またそれが僕の間形成の礎となりました。その何とも言えない野球の素晴らしさをたくさんの人に知ってもらいたいとそのときから思ってしまったのです。

僕の人生を語る上で欠かすことのできない（また同じ話になりますが）青年海外協力隊員としてのザンビアへの赴任。その荷物の中にはぎっしりと野球用具が詰められていました。野球を全く知らない子どもたち。そんな子どもたちに野球を伝える機会を持つことができたこと、子どもたちのいきいきとした目の輝きとはじけるような笑顔を見ることができたこと、生涯忘れることのできない宝物となりました。このことがきっかけとなり、僕は、日本に帰り教師になる決心をしました。その後、地元で教師となり、運良く野球部の顧問に就任することができました。（実は、中学校では自分がやってきたスポーツの顧問になれるとは限らないのです。）昨年ここに来るまでの7年間その学校で大好きな野球を通して、子どもたちと共に汗を流し、涙を流し、またたくさんのことを学ぶことができました。

ホームランを打ったり、三振を取ったりすることは野球の醍醐味かも知れません。しかし、野球の神髄とは「バックアップ」だと私は信じています。それ何？と思われる方も多いかとは思いますが、英語の"back up"は支援するという意味。まさにその通りのプレー、後方支援ということです。野球をテレビで見ると守備側はボールのいったところしか映されません。ではその人だけがプレーしているのかというと、もちろ

んそうではありません。センターにフライが行けばライトやレフトがその後方に走る。ショートにゴロが行けば、レフト、センターなどがショートのバックアップをし、ライト、セカンド、キャッチャーなどがファーストのバックアップに走ります。バックアップする人は、自分のところにボールが来ていないからといって手を抜いて走ったりなどしません。全力でなかまの支援に向かいます。しかし、このプレーはほとんどの場合日の目を見ません。正直に言うと日の目を見ない方が、チームとしてはよいことなのです。しかし、選手たちはそんなプレーに全力を注ぎます。なぜならそのプレーには仲間への大切な想いが込められているからです。「うしろには俺がいるぞ。ミスしてもカバーしてやるから思いっきりプレーしろ。」そんな想いがプレーヤーの安心感となり、お互いの信頼となり、思い切ったよいプレーを生み出すのです。あの小さなボール1球に全員が心をひとつにしてプレーする姿、お互いを思い支え合う姿、これこそが野球の神髄だと僕は信じています。

「バックアップ」これは、実は野球に限った言葉ではありません。いつもそっと見守っていてくれる人、普段は特に何をするわけでもないのに、いてくれることによってとても安心した気持ちになる。そういう人の存在って大切ですよね。私自身も、人の親として、教師としてそんな存在になることができたらと強く思います。

余談ではありますが、私の名前は「栄敏」（えいとし）と言います。初めてあった人に何と読むのですかと聞かれることがよくあります。日本では私と同じ名前の人に会ったことがありませんでした。しかし、韓国に来て「栄敏」という名前は韓国では珍しい名前ではなく、普通にある名前だと聞きました。そして先日、韓国人で戦前の韓国野球の草創期を飾った伝説の名選手に「李栄敏」（イヨンミン）という選手がいたことを知りました。自分と同じ名前の人韓国にいて、それも野球の名選手だったということななんだかととても不思議に思いました。同時に、やはり私は神の見えざる手によってここに導かれてきたのだと再認識し、この名に恥じぬよう、この地で子どもたちと共にがんばっていきたいと思いました。

